

9 西洋医学的標準治療抵抗性の慢性前立腺炎の1例

日本赤十字社和歌山医療センター泌尿器科

中嶋 正和、畠 達也、太田 秀人、樋上 健介
山田 祐也、玉置 雅弘、伊藤 哲之

【緒言】西洋医学的標準治療抵抗性の慢性前立腺炎と考えられる会陰部痛に対し、漢方治療が有効であった1例を経験したため報告する。

【症例】74歳男性。会陰部のジクジクした痛みに対し、X年2月頃より前医で鎮痛薬や抗菌薬、清心蓮子飲等の各種内服薬による治療が行われたが、いずれも無効であった。痛みに加えて食思不振が増悪したため同年7月紹介受診された。

【現症】身長165cm、体重53kg。やや痩せ型で筋肉質、色黒、白髪、寒がりで冷えやすい。神経質な性格。病気を経験したことなし。痛みへの精神的不安があり寝付けない。昼寝すると耳鳴りがあり耳鼻科で相談したが難しいと言われている。目の違和感あり眼科も受診したが異常なし。白内障あるが急がないと言われた。便秘。口臭(+)、厚い白舌苔、舌尖は紅、舌下静脈怒張。腹部やや湿潤、腹力3/5、両臍傍と右下腹部に圧痛のない硬結触れる。小腹不仁(+)。

【臨床経過】瘀血主体で腎陽虚・水滯と考え大黄牡丹皮湯と牛車腎氣丸を処方したところ、便秘や食思不振は改善したが、その一方で耳鳴り、不眠、味覚異常が顕在化した。その都度標治的な処方変更を行いながら治療を継続したところ会陰部痛や耳鳴りは次第に軽快したが味覚異常は軽快しなかった。三黃瀉心湯に変更したところ身体の全体的なバランスがよくなり気の巡りもよくなり、会陰部痛や耳鳴り然り、味覚異常も軽快した。

【考察】三黃瀉心湯は黃連-黃芩で心火を瀉しみぞおちのつかえを解消するという瀉心湯類で最も実証向けの清熱剤であり、鑑別処方として虛証には清心蓮子飲や三物黃芩湯が挙げられる。経過を振り返れば便秘、肩こり、耳鳴り、不眠、などの症状は三黃瀉心湯の典型例と言えようが、初診時に実熱証と捉えきれず、的を外した処方の結果、的が外れた部分の症状が残存した。耳鳴りは腎虚のほか瘀血、肝鬱化火の上逆、脾胃虚弱による痰熱、など様々な原因で起こるとされているが、前立腺炎の病因と共に通する点も多く、西洋医学的治療に難渋する症例に対し漢方治療を行う際には注意すべき症候であると思われる。